

百日咳流行についてのお知らせ

百日咳患者数が増加して、重症例・死亡例も報告されています。百日咳は、ほとんど発熱がなく、初期にはカゼと同じ症状で診断が難しい病気ですが、新生児・乳児は重症化しやすく、注意が必要です。

百日咳は非常に感染しやすい病気です。1人の感染者から12～16人に感染すると言われています。また、最近流行している百日咳は、これまで使用されていた抗生物質が効かない耐性菌になっているため、ワクチンで予防することが必要です。乳児は重症化しやすいため、2か月になったら5種混合ワクチンを接種することが重要です。

百日咳の症状は、普通のかぜ症状で始まり、しだいに咳がひどくなってきます。発熱はないか、あっても微熱程度で、早期診断するためには遺伝子検査・抗原検査が必要で、初期に普通のかぜと見分けることは困難です。その後、特徴的な咳（短い咳が連続的に起こり、続いて、息を吸う時に笛の音のようなヒューという音が出る）がでようになり、百日咳と診断されます。しかし、乳児期早期では特徴的な咳がなく、無呼吸発作からチアノーゼ、けいれん、呼吸停止になることがあり、合併症として脳症もみられます。乳児には、とても危険な病気です。

2か月からのワクチン接種が重要ですが、百日咳ワクチンは、接種後数年で効力が低下してくるため、幼児期から学童期（7歳をピークに5歳から15歳）に感染する児が増加しています。そこで、日本小児科学会は、任意接種で、就学前に3種混合ワクチンを接種するように推奨しています。また、乳児を百日咳から守るために妊娠中に3種混合ワクチンを接種することも推奨されています。成人の百日咳では典型的な発作性の咳嗽はみられず、軽症で診断できないことが多く、新生児・乳児に対する感染源になることがあります。そのため、新生児・乳児を取り扱う医療関係者にも3種混合ワクチンの接種が推奨されています。

百日咳は、特有の咳が消失するまで又は5日間の適正な抗菌薬投与が終了すれば登園可能ですが、現在流行している百日咳の多くはこれまでの治療薬に耐性で5日間の抗菌薬治療後も他の人に感染する可能性があります。咳が続いている間はマスクなどの咳エチケットが必要と考えられます。

（まとめ）

- ① 百日咳は乳児が罹ると無呼吸・脳症などで死亡する可能性がある危険な病気です。
- ② 百日咳は、感染力が非常に強く、初期に診断することが難しい病気です。これまで使用されていた抗生物質が効かない耐性菌が多くなってきたため、予防接種が大切です。園児の予防接種歴を確認して、未接種の児はかかりつけの先生に相談するように勧めてください。
- ③ 2か月になったら5種混合ワクチンの接種をすぐに開始しましょう。年長さんには任意接種ですが、3種混合ワクチンの接種をかかりつけの先生に相談するよう勧めてください。
- ④ 百日咳はほとんどが耐性菌であるため5日間抗生物質を服用しても感染する可能性があります。保育施設で咳エチケットの徹底は困難です。予防接種がとても重要な病気です。